

現代能歌劇「羅城門」

現代語台本・作曲：小菅 泰雄

原作：観世小次郎信光作謡曲「羅生門」

時 平安時代中期 春

所 平安京の大内裏・羅城門

登場人物と配役

さくら 奥の方付の腰元

奥の方 源頼光の奥方

源頼光 平安中期の武将

渡部綱 源頼光の家臣

藤原保昌 平安時代の貴族

第一場「大内裏」

前奏

奥の方の aria 「京の都の」

奥方 京の都の九条朱雀に羅城門という立派な門がございます。延暦十三年の建立で、高さ7間、間口9間、前と後ろに5段の石段があり、それはそれは大きな門で二重の瓦葺き、正面に羅城門という額が掲げられ、都の安寧を願って毘沙門天を安置しています。

さくらの aria 「時は春」

さくら 時は春、花は咲き蝶は舞い、鳥は歌う。帝の御姿は麗しく、民は幸せに過ごしています。

さくら、奥の方、頼光・綱・保昌の五重唱

九重の春は久しく。帝の御姿麗しく。

源頼光 さあさあ皆さん。ここ春雨の降るきのう今日。晴れ間が見えぬつれづれに。酒でも飲みながら語り合いませんか。

女声二重唱

軒の雨だれ水玉の、春のながめの寂しさに、友と語らう夕まぐれ。

男声三重唱

酒をすすめる盃に、弥猛心は一つになる。思う心に底意はなく、打ち解けてつれづれに。降りしきる宵の雨、言葉にしなじな花が咲き。近くに寄りて語り合う、これぞあま夜の物語。面白やもろともに、もろともに。

頼光 さあさあ皆さん、この頃都に耳寄りの話はありませんか。

綱 ありますあります。九条の羅城門に鬼が棲みついて、夜には人が通らなくなるそうです。

保昌 ちょっと待て。殿の前でそのような事をいうのではない。

羅城門がこの国の正門であってみれば、草木のすべてが帝のもの。どこかの鬼が居場所にすると聞いたなら、鬼神だろうと棲まわせてはならぬ。こんな軽率な噂話を殿のお耳に入れてよいのか。

綱 何と、軽率な噂と言うのか。不審に思うなら今夜にでも、羅城門に行つて確かめればよい。

保昌 さては、私が行かないと思っているな。ならば羅城門に行つて看板を立てて来ようではないか。

奥方 このようなお話は無益ではございませんか。

さくら さようでございます。無益でございます。

頼光 ウハハハハ。奥たちが、このように申しておるぞ。

綱 保昌に、少しも遺恨はございません。帝の御為ならば、私、渡部綱が看板を立ててまいりたく存じます。

頼光 よく言った！綱のいう通り帝の御為だ。綱、羅城門に看板を立てて参れ。

綱 承知いたしました。

五重唱 渡部の綱は看板を授かり、御前を退出した。羅城門の鬼を退治しなければ、二度と人に顔向けできない運命の狭間。武士の弥猛心は恐ろしい。弥猛心は恐ろしい。

(中入り)

第二場「羅城門」

一セイ＝シテの登場に用いられる能の形式

綱の aria: 「かりそめの口論から」

綱 かりそめの口論から、羅城門の鬼を見に、私が行くことになった。  
鎧を身につけ、兜の緒をしめ、刀を佩いて、馬にまたがり唯一人外に出た。  
二条大宮を南の方に、羅城門目指して馬を進めた。

五重唱: 「春雨が降りしきる」

春雨が降りしきる。夜が更けていく。

綱の aria: 「暁の鐘が鳴る」

暁の鐘が鳴る。東寺の前を通り過ぎた。さあ、九条朱雀の羅城門に着いた。  
急に雨が強くなった。すさまじい雨だ。風も強くなった。馬が進まない。

五重唱: 「馬は嘶き」

馬は嘶き、身震いして、立ち尽くす。

綱 仕方ない。馬から降りよう。

五重唱 綱は地上に降り立った。羅生門を見上げた途端、更に凄まじい豪雨になった。  
綱はかまわず、豪雨中を九条表通りにうって出た。

綱 羅生門の石段を駆け上がる。渡部の綱は羅城門に看板を立てた。  
さあ、戻ろう。おや？ 後ろに誰がいるぞ！

五重唱 綱は、兜を掴まれ、後ろに引き戻された。

綱 鬼神だ！。えい！（刀で斬りつける）

五重唱 鬼神は怒って、兜の紐をひきちぎった。

綱 石段を飛び降りて、鬼神と対峙する。

五重唱: 「鬼神の背丈は」

五重唱 鬼神の背丈は羅城門の軒にとどくほど。  
奪った兜をかつぱと投げ捨て、綱をにらみつける。

男声三重唱: 「その両眼は」

その両眼は日月の如く輝き、掴みかからんばかりの勢い。

女声二重唱: 「綱は静かに」

綱は静かに名刀「髭きり」を抜き放ち、鬼神に振りかざした。

綱の aria: 「おまえは」

綱 「おまえは帝の威厳を傷つけた。その天罰を受けるがよい」

五重唱 鬼神は鉄杖を振り上げ、綱めがけて打ちかかる。  
綱は飛び違いざま、斬りつける狭間に組み付いた。

綱 名刀「髭きり」だ。えーい！

五重唱 見ると、鬼の腕が切り落とされていた。

ひるんだ鬼神は、天空高く駆け上がり、黒雲のかげに隠れて、見えなくなった。  
(鬼神のかわりに保昌の声で) 「おぼえている」。 — 間奏 —

保昌 さすがに我が友 渡邊の綱！ 大したものではないか。

頼光 綱、よくやった。 渡邊の綱、大したものだ。

女性二重唱: まあ、さすがです。鬼神の腕を切り落としたそうではございませんか。

男声三重唱: 武士の弥猛心 武士の弥猛心 武士の弥猛心は恐ろしい。

渡邊 綱 渡邊の綱は羅城門の鬼の腕を切り落とした。

女声二重唱: さすがでございます。

保昌 さすがに我が友渡部の綱大したものだ。

女声二重唱: 渡邊の綱は、鬼神よりもおそろしい。

頼光・保昌: 綱は功名をうちたてた。

五重唱 鬼神よりも、もっと恐ろしい。

おわり